

天理市埋蔵文化財調査概報

平成13・14年度（2001・2002）

2007

天理市教育委員会

例　　言

- 1、本書は、天理市教育委員会が平成13・14年度に行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2、発掘調査を実施した遺跡名及び調査地点、調査期間、調査担当者は次ぎのとおりである。

平成13年度

長寺遺跡（第16次調査）	調査地	天理市櫟本町2066-1番地（天理市立櫟本幼稚園）
	調査面積	250m ²
	調査期間	平成13年2月7日～平成13年3月13日（試掘） 平成13年4月12日～平成13年7月2日（本調査）
	担当者	松本洋明

平成14年度

薬師遺跡	調査地	天理市石上町608-1番地他
	調査面積	1044m ²
	調査期間	平成14年9月12日～平成14年11月29日
	担当者	青木勘時

- 3、調査補助及び整理作業は次ぎの方々である

芳村信芳、中森軍之助、中森富美代、河喜多淑子、松本真並、藤岡早希、江角 啓、古田 賴、

- 4、本書の執筆は、調査担当者が行い編集は、松本洋明が行った。

目　　次

平成13年度（2001）

長寺遺跡（第16次調査） ······ 1

平成14年度（2002）

薬師遺跡 ······ 17

平成 13 年度

長寺遺跡（第16次）櫻本町

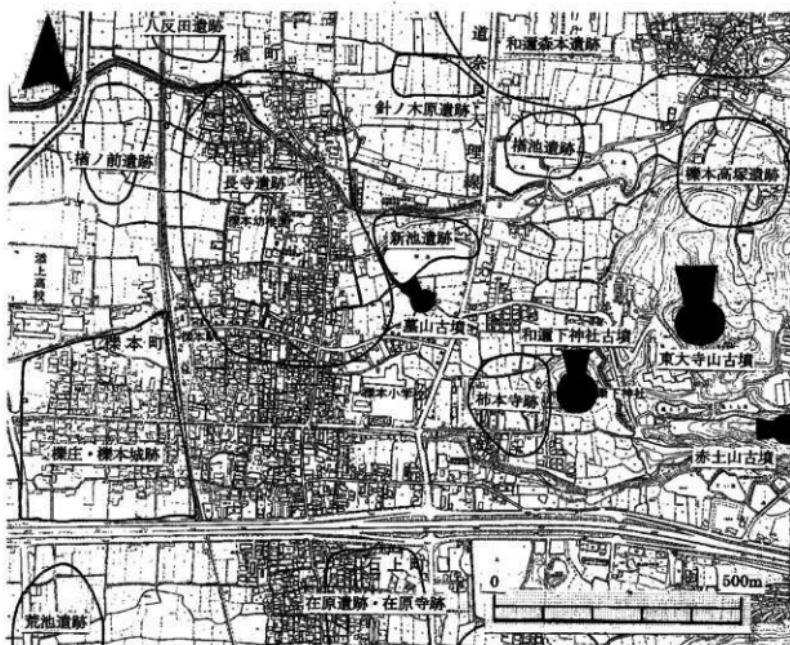


図1 長寺遺跡位置図 (S:1/10000)

I はじめに

天理市の北部、櫻本町に所在する長寺遺跡はJR桜井線櫻本駅の北東側に広がり、弥生・古墳時代から古代・中世・近世に至るまで様々な時代の性格をもつ遺跡が展開した複合遺跡である。地形は、奈良盆地の東山麓から伸びた通称東大寺山の丘陵が盆地に迫り出した先端部裾にあり、櫛川と高瀬川に挟まれた微高地に立地している。長寺遺跡の周辺には同様な小規模遺跡が所在し、それぞれ未調査であるため定かでないが、長寺遺跡との関連性があるかもしれない。長寺遺跡の東方にある東大寺山には、東大寺山古墳群が所在し古墳時代前期～中期にかけて東大寺山古墳、和邇下神社古墳、赤土山古墳をはじめとする大形前方後円墳が築かれ、古墳時代中期後半～後期～終末期にかけては小規模な古墳が群集する。近年の調査では、長寺遺跡からも古墳時代前期から中・後期にかけて多数の古墳跡が検出され、古墳群の造営が丘陵地に限らず山裾の長寺遺跡一帯まで広範囲に展開している。今回報告する第16次調査は、天理市立櫻本幼稚園の改築工事に伴い幼稚園の構内を試掘調査したところ古墳の周濠跡を検出し、事前に本調査を実施したものである。



図2 長寺遺跡第1～16次調査地点位置図 (S:1/150)

II 調査の概要

(1) 長寺遺跡の現状（図2参照）

a、景観

長寺遺跡は、山側に近い東部で標高69m前後、低地側の西部で標高66m前後になり、山側から盆地側に向かって緩やかに傾斜した地形にある。第3次調査を行った地点と第7次調査の地点では南東から北西に伸びた自然流路（谷筋）を検出し、また第10次調査の地点でも南東から北西に流れる自然流路（谷筋）を調査した。現在の町並みからこうした起伏のある地形について分からぬが、これまでの調査成果では弥生時代から古墳時代にかけて長寺遺跡には複数の自然流路が所在し、自然流路を挟んで両側に微高地があり、地形上には集落跡や古墳等が築かれていたようだ。谷筋を調査した第10次調査地点は、奈良時代になると自然流路であった谷筋の落ち込みが造成されて微高地部分と区別がつかなくなり、柱穴遺構や井戸遺構等が出現している。奈良時代以降、長寺遺跡周辺の環境は寺院の造成などによって地形的な変化を伴っていくようだ。

b、弥生時代

弥生時代は、平等坊・岩室遺跡のような拠点集落に見られるおびただしい遺構、遺物等の出土はないが、溝や井戸、土坑等の遺構が遺跡内で広範囲に展開する。時期的には、弥生時代前期末まで遡る土器も出土しているが、弥生時代前期～中期前半の遺構は今のところ見つかっていない。弥生時代中期後半の遺構は目立って出土し他の時期に比べて遺物量も多く、長寺遺跡の弥生時代は中期後半（大和第IV様式）に最盛期を迎えるようだ。第10次調査では自然流路の跡から弥生後期末～古墳時代前期初め頃の遺物が多数出土し、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて再び遺跡が活発になるようだ。

c、古墳時代

古墳時代は、集落跡を示す遺構は出土していないが、古墳の周濠跡が広範囲に展開する。すでに墳丘は削平され現状から古墳の存在を確認することはできないが、第16次調査を含めると7基の古墳跡がこれまで確認されている。特に櫻本公民館西側の第4・8次調査地点では、古墳時代初頭の周濠跡が見つかり、大形前方後円墳を築いた東大寺山古墳群を形成する前段階の古墳出現期にかけて長寺遺跡に古墳が出現する。一方、検出した古墳の多くは古墳時代中・後期のもので、墳丘規模も小さく方墳状のものが目立つ。

d、奈良時代以降

興福寺の中世文書には長寺の存在を示す資料があるが、長寺遺跡の古代寺院については文献資料がない。櫻本公民館の改築工事に伴う第1次調査地点では、柱穴遺構と奈良時代の瓦類が多数出土し寺院跡が奈良時代まで遡ることが判明したもので、その後、第8次調査及び第14次調査地点から東西方向に延びる2条の大溝が検出され、奈良時代の土器とともに瓦類も多数出土したため寺域を示す遺構と考える。今のところ基壇など寺院の中心部を示す遺構は検出されていないが、奈良時代創建の長寺廃寺の寺域がどこまで広がるか興味深い課題である。

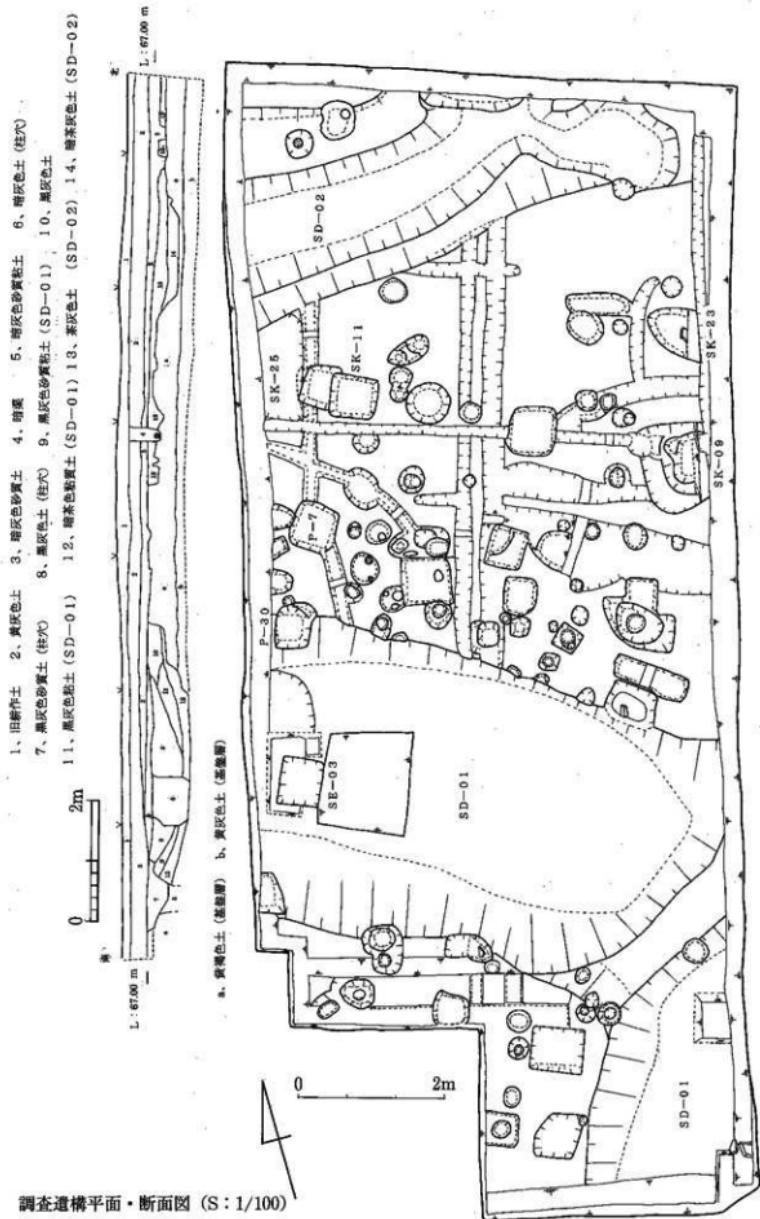


図3 調査構造平面・断面図 (S:1/100)

(2) 第16次調査について

a、調査区の設定と基本土層

調査地点は大垣市立櫻本幼稚園の敷地内に位置し、建設工事に伴う協議から南北22m、東西10mにわたって調査区を設定した。構内は、およそ1mのグランドを整地した盛り土があり、盛り土直下から旧耕作土（図3-1）耕作床土の黄灰色土（図3-2）、開墾に伴う素掘り溝跡（図3-3）、断面図にはその下部から遺跡を伴う黄褐色土基盤層（図3-a・b）があり、基盤層の上面で弥生・古墳時代及び古代柱穴遺構を検出している。調査では、基盤層に黒色系土壤の遺構が伴い明瞭な土質の違いによって遺構を検出したが、土層を示す層序関係には黒色系土層が認められず、また弥生・古墳時代の包含層もなく、奈良時代以降に地形を削平したため現状のような基本土層になったと思われる。

検出した遺構は、方形で掘削規模がやや大きい柱穴遺構、時期は定かでないが円形ピット状で規模の小さい柱穴跡、調査区の南半部から検出したSD-01古墳時代の周濠跡、同じく調査区の北端部で検出したSD-02大溝、弥生時代の土坑などである。出土遺物は、弥生時代中期の土器破片が最も多くみられ、調査地点が弥生時代中期にかけて集落跡であったことが分かるが、遺構はSK-09・23・25などに限られた。また、古墳時代前期（布留期）の土器破片も出土しているが、この時期の遺構は定かでない。

b、弥生時代の遺構

調査では、調査区の東部で検出したSK-09・23、調査区の西部で検出したSK-25がある。SK-09は、長辺1.8m、検出した深さ72cm、断面二段形状で落ち込み、内部から弥生時代中期末頃（第IV様式）の土器が出土している。遺構の性格は、素掘りの井戸かもしれない。その北側にあるSK-23は、径90cm、検出した深さ10cmほどの浅い落ち込みで遺構の性格は定かでないが、弥生時代中期後半（第IV様式）の土器が出土している。SK-25は、一辺1.5m、検出した深さ3cmの落ち込みで、遺構の性格は定かでないが弥生時代中期後半（第IV様式）の土器が出土している。

c、古墳時代の遺構

調査区の南半部から幅6m、検出した深さおよそ40cmの逆台形状に落ち込む大溝で、内部から多数の埴輪が出土した古墳の周濠跡である。形態は、調査区を東西に縦断する部分（SD-01西）と南北につながる部分（SD-01東）があり、形状から古墳の跡と思われる。周濠の内部は、平坦な底面だが、墳丘コーナー部で20cmほどの盛り上がった畔状の遺構があり渡り堤ではないかと思われる。周濠は、検出した状況から輪郭が直線的に延びているため、一辺10mほどの方墳と思われる（第16次調査で検出した古墳跡をSD-01方墳跡と呼ぶ）。周濠内には転落石がなく、墳丘基底部を築いた葺石の痕跡も認められず葺石はない。周濠内は空堀であったと思われるが、周濠が埋没した後に奈良時代の井戸遺構（SE-03）が築かれている。また柱穴遺構が墳丘内部まで及んでいるなど、奈良時代以降に墳丘が削平を受けたと推測する。周濠内部から多数の円筒埴輪の破片が出土したが、円筒埴輪の底部が原形のまま周濠内に落ち込んでおり、墳丘を削平した直後、古墳に並んでいた埴輪を周濠に廃棄したものと思われる。他に、周濠内からTK-23期の須恵器杯等がまとまって出土している。

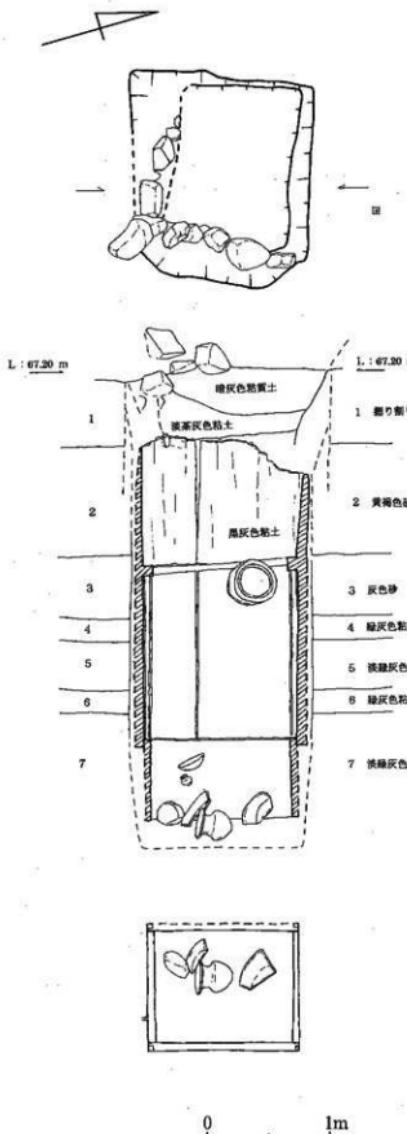


図4 SE-03 井戸遺構 (S 1/40)

奈良時代以降の遺構について

SE-03 (井戸遺構)

調査区の南半部、SD-01 古墳跡の周濠部分から井戸遺構を検出した。検出した深さ 4.0m、幅 1.5m、方形の掘込みに板材を桟木で組み上げた幅 1.4m、高さ 1.2m の井戸枠と、井戸の上部には石材の一部が出土し、木製の井戸枠と上部を石組で造り上げた井戸の跡である。井戸底には 60cm × 50cm、高さ 35cm の枱状木製品を枠組に用いている。井戸の内部には黒灰色粘土が堆積し、井戸底から奈良時代の須恵器数点が出土している。形態や規模から推測して、寺院跡に伴う遺構でと思われる。

柱穴遺構

柱穴遺構は調査区の全域から多數検出しているが、その内、調査区の西部で検出した一辺 70cm ほどの柱穴による柱列がある (SK-11、P-7・P-30)。柱穴の間隔はおよそ 2 m あり平面図では 2 間の柱穴が並んでいるが、SE-03 井戸遺構の西側及び SD-01 古墳跡の墳丘部分から土層断面 (図 3-6・7・8 層) で柱穴遺構を検出している。柱列は 4 間だが規模や建物の形態は定かでない。これら柱穴遺構に伴う遺物は少なく、建物が存在した時期について明確ではないが、SE-03 井戸遺構と並行又は廃絶した後に築かれた建物跡と思われ、寺院跡に伴う遺構と考える。

III SD-01 方墳跡の埴輪について

SD-01 方墳跡の周濠から多数の埴輪の破片が出土し、いわゆる5期の円筒埴輪の破片であるが、形象埴輪も含まれる。実測した資料は一部だがSD-01 方墳跡の時期を示すものとして報告しておく。

円筒埴輪は、口径35cmの大振り（図5-3・4）と口径26cm前後のや小振り（図5-1・2）の二形態に区別できる。口縁部から底部まで完全な形態を残す資料が出土していないため、器高ではどの程度大きさに違いがあったのかは不明である。天理市荒寺古墳の調査資料など円筒埴輪の形態に大小があり、そうしたものと類似している。円筒埴輪のスカシ孔は、円形で口縁部より一段下に施すもの（図5）、胴部には2・3段目にスカシ孔の向きを違えて施すもの（図6-6・7）、方形のスカシ孔を胴部2段目施すもの（円筒埴輪とは異なるかもしれない、図6-10）がある。技法的には、底部から胴部・口縁部にかけて全面をタテハケで外面調整仕上げするものと、ハケではなくタテナデで仕上げるものがあり、出土量は前者のタテハケ仕上げの円筒埴輪が目立つ。埴輪の細部は、タテハケ仕上げの円筒埴輪に底部外面を板押圧で施し、底部端面の内側には指押圧を施すもの（図6-9、図7-16・17）、底部外面にナデを施すもの（図7-13）、2次的な調整を加えずタテハケ仕上げのままのもの（図6-10・11、図7-12）がある。一方、タテナデで仕上げる円筒埴輪には底部外面をタテケズリ、底部内面をヨコケズリで底部仕上げするもの（図6-8、図7-14・15）と、底部に目立った調整を見ないもの（図6-6・7）、底部の成形段階に施していた粗いヨコハケの跡が残るもの（図6-7）がある。焼成は、ほとんどが土師質だが硬質のもの（図5-2）もある。出土した円筒埴輪の胴部に施している凸帯は、全て断続ナデ技法とヨコナデで仕上げているが、図6-7の場合は、底部と2段目の境にある凸帯が他と違い、凸帯の端面をハケで調整した後、凸帯の側面をヨコナデで仕上げ、端面にはハケ調整跡が残っている。他に、円筒埴輪の口縁部下にヘラ記号を施したもの（図5-5）がある。なお、朝顔形埴輪については、特徴を示す破片が出土していない。

形象埴輪は、復元できるものが少なく破片に限られるが、家形埴輪に伴う屋根部材・破風（図8-20）と、同じく凸帯を成形し入口を表現したものか凸帯の下部に方形のスカシ孔の痕跡を伴う壁面（図8-21）など、切妻造りの屋根をもつ家形埴輪が存在したようだ。また、馬形埴輪に伴う胴部尻尾のつけ根とそれに伴う帶金具を竹管文で表現したもの（図8-23）、同じく胴部鞍の下にある障泥を表現したもの（図8-24）など、いずれも焼成は硬質で、馬装した馬形埴輪が存在したようだ。器面に鋸歯文を描いた破片（図8-22）は、内面に剥離した痕跡を伴うため盾形埴輪など一部と思われ、器財埴輪も存在する。図8-19は、鱗状で形態は定かでない。人物埴輪（図8-25）は、残存高39cm、底部復元径15cm、頭部は欠損しているが器面を細かいタテハケ仕上げしたものである。胴部前面には竹管文で装飾を加えており、装束を表現したものと思われる。また、岡示していないが腕の破片も出土している。こうした形象埴輪の破片は、SD-01 方墳跡の東側周濠跡付近から主だって出土しており、人、馬、家、器財埴輪などを一定の場所に並べられていたのかもしれない。

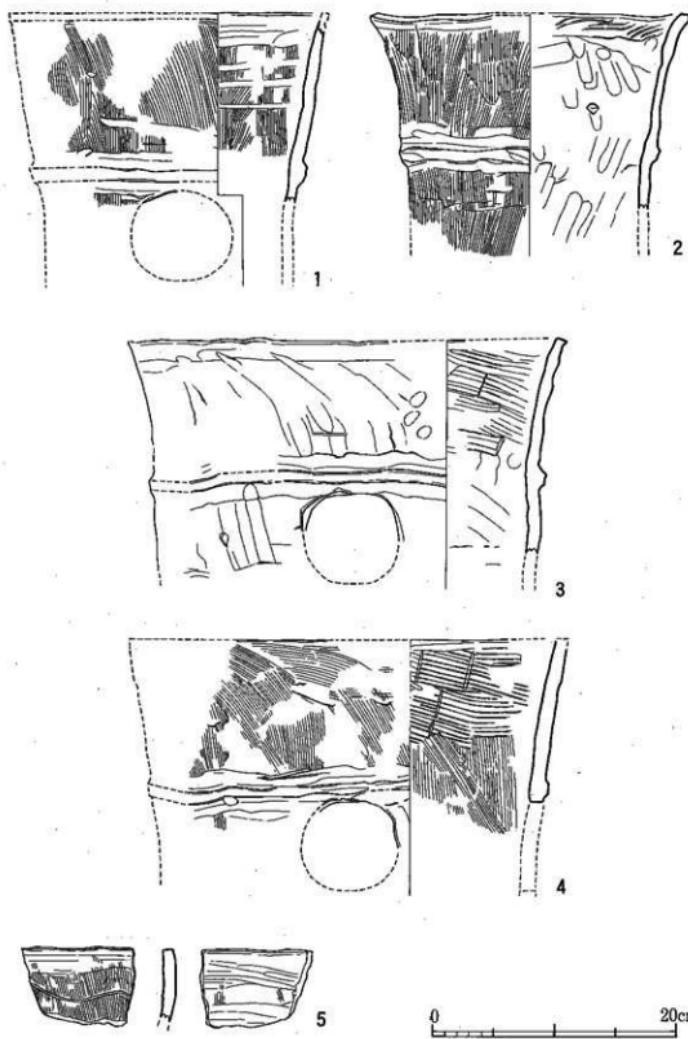


図5 SD-01 古墳周濠出土遺物実測図1 (S:1/4)

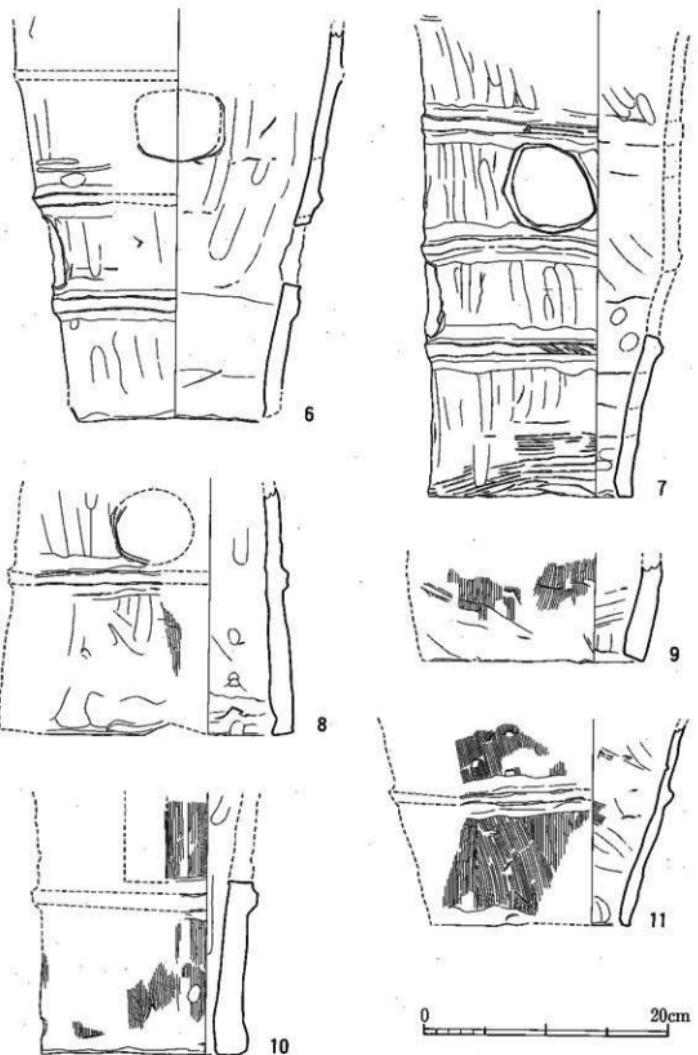


図6 SD-01 古墳周濠出土遺物実測図 (S:1/4)

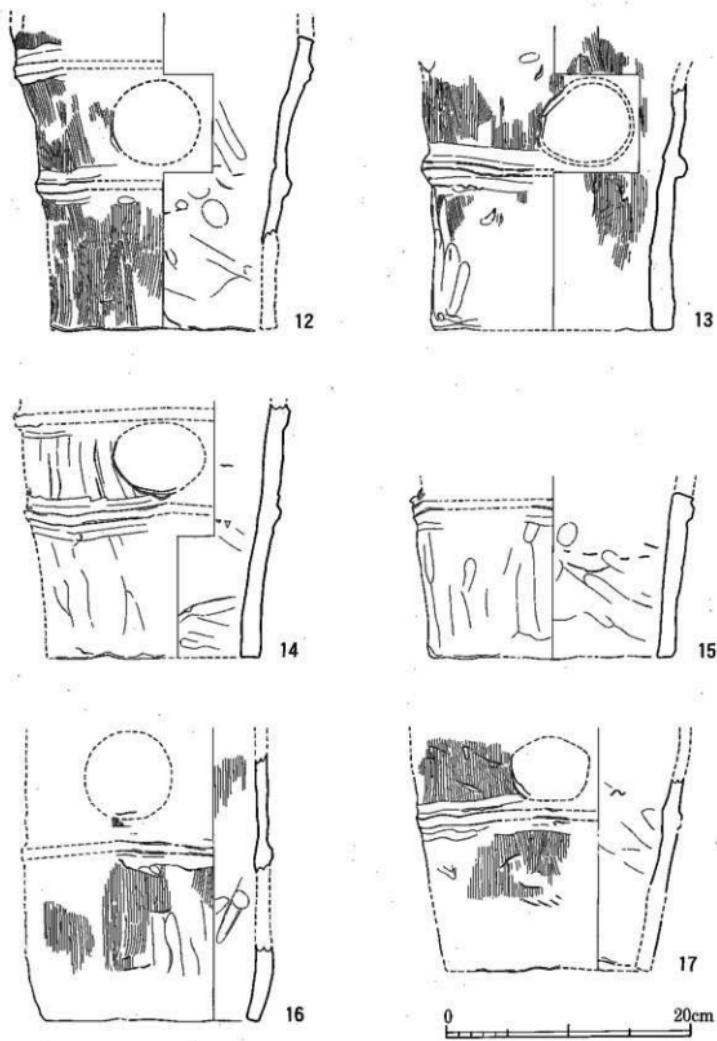


図7 SD-01 古墳周濠出土遺物実測図 (S: 1/4)

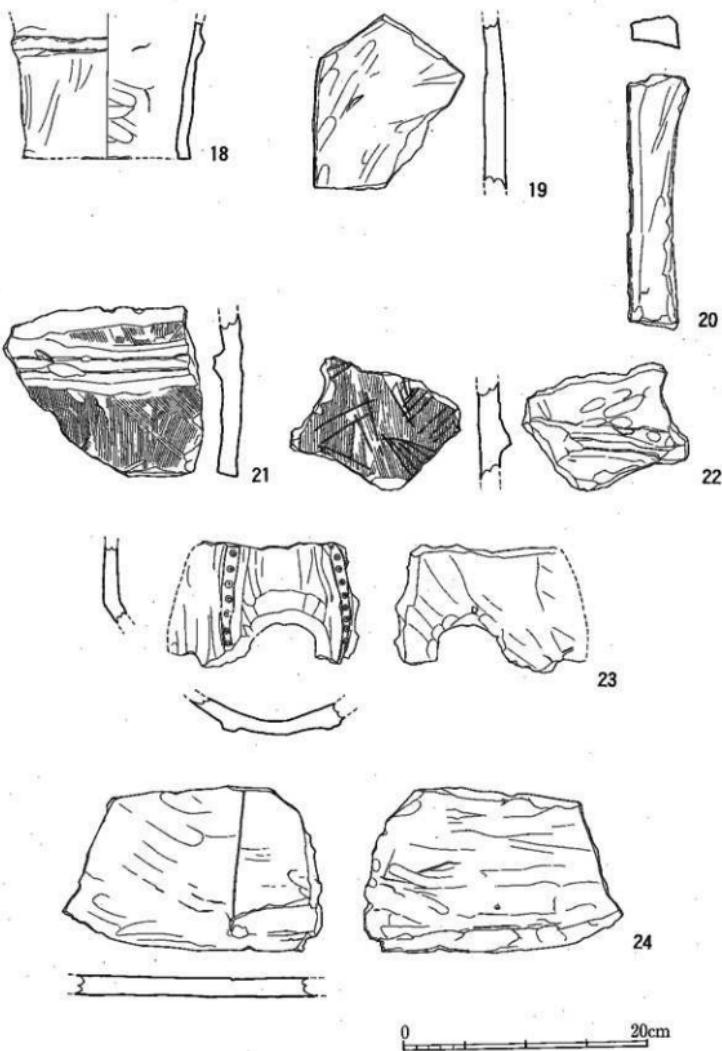


図8 SD-01古墳周濠出土遺物実測図 (S:1/4)

図面番号	器形	口径(cm)	器高(cm)	形態の特徴		技法の特徴		色調		胎土	備考	出土地点・遺構
				外面	内面	外面	内面	にぶい焼	(5YR 7/4)			
1	円筒埴輪口縁部	26.2	残存高 18.2	タガがあり、円形スカンジンの一部が残る。口縁部から底部に向かってすぼまる。	内外面ともにタデハケ組い、ナデ。タガ部分はヨコナデ。	にぶい焼 (5YR 7/4)	にぶい焼 (5YR 7/4)	1.0mm程 度の妙粒	1.0mm程 度の妙粒	口縁部は 1/4程度 残る。		
2	円筒埴輪口縁部	26.2	残存高 19.8	タガがあり、円形スカンジンの一部が残る。口縁部から底部に向かって広がる。	外側はタデハケ、ナデ。タガ部分はヨコナデ。内面はナデ、タカキ。	にぶい焼 (5YR 6/4)	にぶい焼 (5YR 6/4)	1.0mm程 度の妙粒	1.0mm程 度の妙粒	口縁部は 1/2程度 残る。		
3	円筒埴輪口縁部	35.6	残存高 19.9	タガがあり、円形スカンジンの一部が残る。最上段のタガから口縁部に向かって広がる。	外側はタデハケ、ナデ。内面はナナメハケ(左上がり)／組い、粘土の接着面も残る。	檻 (5YR 6/6)	檻 (5YR 7/6)	2.0mm程 度の妙粒	2.0mm程 度の妙粒	口縁部は 1/2程度 残る。		
4	円筒埴輪口縁部	35.6	残存高 18.5	タガがあり、円形スカンジンの一部が残る。口縁部から底部に向かってすぼまる。	外側はタデハケやや組い、ナデ。内面はナナメハケ(左上がり)／組い、粘土の接着面も残る。	檻 (5YR 7/6)	檻 (5YR 7/6)	1.0mm程 度の妙粒	1.0mm程 度の妙粒	口縁部は 1/4程度 残る。		
5	円筒埴輪口縁部			波のような線刻が見られる。	表面ともにタデハケ組い、ナデ。	にぶい焼 (5YR 7/4)	檻 (5YR 7/6)	1.0mm程 度の妙粒	1.0mm程 度の妙粒	口縁部破 片。		
6	円筒埴輪脚部～ 底部	18.2	残存高 36.4	タガあり、2段目、3段目に円形のスカンジンが残る。底部から口縁部に向かって広がる。	内外面ともにナデ。タガの部分はヨコナデ。内面には粘土の接着面が残る。	檻 (5YR 7/6)	檻 (5YR 7/6)	2.0mm程 度の妙粒	2.0mm程 度の妙粒	口縁部は 1/4程度 残る。		
7	円筒埴輪脚部～ 底部	17.0	残存高 40.3	タガあり、2段目、3段目に円形のスカンジンが残る。底部から口縁部に向かってやや広がる。	内外面ともにナデ。タガ部分はヨコナデ。内面には粘土の接着面が残る。	檻 (2.5YR 7/6)	明赤焼 (2.5YR 5/6)	3.0mm程 度の妙粒	3.0mm程 度の妙粒	口縁部は 1/4程度 残る。		
8	円筒埴輪脚部～ 底部	23.8	残存高 21.8	タガあり。円形スカンジンの一部が残る。	外側はタデハケとナデ。タガ部分はヨコナデ。内面はナデ。	深檻 (5YR 8/4)	深檻 (5YR 8/4)	2.0mm程 度の妙粒	2.0mm程 度の妙粒	底盤は 1/4程度 残る。		

図面番号	器形	口径(cm)	器高(cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調		胎土	備考	出土地点・遺構
						外面	内面			
9	円筒埴輪底部	底部径 17.8	残存高 9.1	底部から口縁部に向かってやや下がる。	外面はタテハケ、ナデ。内面はナデ。	焼(5YR 7/6)	焼(5YR 7/6)	1.0mm程度の砂粒を含む。	1/2割残る。	
10	円筒埴輪腹部～底部	底部径 17.0	残存高 22.2	タガあり。2段目の正面と右側に長い部分と思われるスカランの一部が残っている。底部から口縁部に向けて、あまり広がらない。	外面はタテハケ、ナデ。タガ部分はヨコナデ。内面はナデ。	焼(7.5YR 7/6)	焼(7.5YR 7/6)	2.0mm程度の砂粒を含む。	底部は1/2程度残る。	
11	円筒埴輪胴部～底部	底部径 16.4	残存高 16.7	タガあり。底部から口縁部に向かって広がる。	外面はタテハケ、ナデ。タガ部分はヨコナデ。内面はヨコハケ、ナデ。粘土の混合量も異なる。	焼(5YR 8/3)	焼(5YR 8/3)	3.0mm程度の砂粒を含む。	底部は1/4程度残る。	
12	円筒埴輪胴部～底部	底部径 18.4	残存高 25.5	タガあり。2段目、3段目に円形スカランが一部残る。2段目の中ほどカシが一部残る。底部から口縁部に向かって広がる。	外面はタテハケ、ナデ。タガ部分はヨコナデ。内面はナデ。	焼(7.5YR 8/3)	浅黄褐色(10YR 8/3)	2.0mm程度の砂粒を含む。	底部は1/4程度残る。	
13	円筒埴輪胴部～底部	底部径 19.6	残存高 25.2	タガあり。2段目に円形スカランが一部残る。立ち上がりは、底部から口縁部に向かって、ほどんど広がらない。	外面はタテハケ、ナデ。内面はヨコナデ。内面には粘土の接合痕がある。	浅黄褐色(7.5YR 8/3)	浅黄褐色(10YR 8/3)	2.0mm程度の砂粒を含む。	底部は1/3程度残る。	
14	円筒埴輪胴部～底部	底部径 17.2	残存高 21.7	タガあり。円形スカランが一部残る。立ち上がりは、底部から口縁部に向かって広がる。	内面ともにナデ。タガ部分はヨコナデ。内面には粘土の接合痕がある。	浅黄褐色(7.5YR 8/6)	焼(7.5YR 8/6)	3.0mm程度の砂粒を含む。	底部は1/3程度残る。	
15	円筒埴輪底部	底部径 20.0	残存高 14.8	タガあり。円形スカランが一部残る。立ち上がりは、底部から口縁部に向かってやや広がる。	内外ともにナデ。内面には粘土の接合痕がある。	内面には粘土の (10YR 8/6)	燒(7.5YR 7/6)	2.0mm程度の砂粒を含む。	底部は1/2程度残る。	
16	円筒埴輪底部	底部径 17.3	残存高 22.8	タガあり。2段目に円形スカランが一部残る。底部から口縁部に向かってやや広がる。その際にはほぼまっすぐ上がる。	内面ともにタテハケ(やや粗い)、ナデ。タガ部分はヨコナデ。	焼(5YR 7/6)	焼(5YR 7/6)	2.0mm程度の砂粒を含む。		

図面番号	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色調		胎土	備考	出土地点・遺構
						外面	内面			
17	円筒埴輪脚部～尾部	底部径 16.4	残存高 19.7	外腹はタテハケやヨコハケがあり。円形容スカジが一部残る。外腹から口縁部にかけて広がる。	内腹はヨコハケやナデ。内腹に粘土の接合痕あり。	[にぶい緑 (5YR 7/4)]	[にぶい緑 (5YR 7/4)]	2.0mm程の砂粒を含む。	底部は1/2程度焼る。	
18	形象埴輪底部	底部径 13.8	残存高 11.4	外腹と内腹ともにナデ。タガ部分はヨコハケ。底部から口縁部に向かってやや広がる。	内腹ともにナデ。	[暗赤 (10YR 5/1)]	[灰褐色 (7.5YR 5/2)]	1.0mm程の砂粒を含む。	底部は1/2程度焼る。	
19	形象埴輪片			不明形象埴輪の腹部部分。	表裏ともにナデ。	[浅黄緑 (7.5YR 8/4)]	[浅黄緑 (7.5YR 8/3)]	1.0mm程の砂粒を含む。		
20	家形埴輪 (破壊・壓搾)			右側面は剥離しており、剥離面に向かって厚くなっている。	表裏ともにナデ。	[青 (7.5YR 7/6)]	[にぶい緑 (7.5YR 7/4)]	1.0mm程の砂粒を含む。		
21	家形埴輪 (壁部品)			表面に突帯がある。	表面はナナメハケ/右下がり/横かい。ナデ。突帯部分はヨコナデ。裏面はナデ。	[にぶい緑 (5YR 7/4)]	[浅黄緑 (7.5YR 8/3)]	1.0mm程の砂粒を含む。		
22	形象埴輪片			表面には縦刻があり、裏面には突帯がある。	表面はハケやや粗い。裏面はナデ。	[にぶい緑 (5YR 7/4)]	[にぶい緑 (5YR 7/4)]	3.0mm程の砂粒を含む。		
23	馬形埴輪 (頭部)			2本の突帯には円形の文様が型で押されている。	内外面ともナデ。	[にぶい緑 (7.5YR 5/3)]	[明赤褐色 (5YR 5/6)]	1.0mm程の砂粒を含む。		
24	馬形埴輪 (胴部)			表面に線刻と剥離痕が見られる。	表面はナデ。	[にぶい緑 (5YR 6/4)]	[にぶい緑 (5YR 6/4)]	2.0mm程の砂粒を含む。		
25	人物埴輪	底部径 15.0	残存高 39.2	両腕の下に円形容スカジあり。首に横向きの縦刻あり。腰部分にも短い縦刻1条ある。脇部に竹管文ココロ。脇部はタテハケ/ナナメハケ(右上がり)を上上がり。胸部はナデ。タテハケ/ヨコハケ/ナデ。ハケ(左上がり)。底部に粘土の接合痕がある。	内腹に粘土の接合痕がある。	[淡黄緑 (7.5YR 8/3)]	[淡黄緑 (7.5YR 8/3)]	2.0mm程の砂粒を含む。		

IVまとめ

長寺遺跡の中央部、天理市立櫻本幼稚園の校庭で実施した第16次調査は、黄褐色土の基盤層を伴う良好な地形上にあって、弥生時代中期後半、古墳時代前期、古墳時代後期から奈良時代にかけて遺跡が出土した。しかし、地盤の削平によって、本来は存在したであろう弥生・古墳時代の遺物包含層が損なわれ、SD-01古墳跡は墳丘自体が消滅していた。

弥生時代は、中期後半の土坑や井戸跡と思われる遺構があり、土器破片も比較的出土している。住居跡など集落跡を示すような遺構は確認していないため、今回の調査地点における集落の様相は定かでない。ただSK-09が素振りの井戸だとすれば、平等坊・岩室遺跡などの拠点集落と同様に長寺遺跡でも弥生時代中期後半には井戸の普及が指摘できる。

古墳時代は、初頭と中・後期に様相が区別できる。古墳時代前期の遺構は今回の調査では検出していないが、出土土器において布留期に並行するものがある。第3次調査地点の自然流路や第10次調査地点の自然流路では布留期の遺物が多数出土しており、第4・8次調査で出土



図9 SD-01出土の人物埴輪（S 1/4）

した庄内期の古墳跡など長寺遺跡も縦向遺跡と同様に古墳時代初頭にかけて活発に展開したようだ。長寺遺跡の東方にある東大寺山丘陵には古墳時代前期の大形前方後円墳が出現するが、長寺遺跡の動きは古墳時代初頭で大形前方後円墳の造営がなされる前段階の様相であり、天理市北部の古墳時代の動向を考える重要な遺跡の一つだといえる。一方、古墳時代中・後期は、埴輪を多数含むSD-01方墳跡を検出し、いわゆる5期の円筒埴輪と人物、馬、家などの形象埴輪が周濠から出土している。時期的には、古墳時代中期末から後期頃と推測する。調査地点から200m南方にある櫻本小学校では、かつて校庭の造成時に多数の埴輪が出土したと言われている。それに馬形埴輪など形象埴輪も含まれ、地元では埴輪の窯跡として小学校に説明板が施されているが、第16次調査SD-01方墳跡のように埴輪を削平された古墳が存在したとすれば、小学校の造成に際して出土した埴輪も古墳の周濠跡ではないだろうか。

奈良時代の遺構は、SE-03井戸跡1基と、同時期又はその後に建てられた柱穴遺構などで、長寺廃寺に関係する遺構と思われる。しかし、第16次調査地点が第8、14次調査で検出した寺域を示す大溝遺構の外側に位置しているため、長寺廃寺に伴う建物等の遺構が寺域とどのような関係にあるのか、さらに地形復元や景観などを考慮した検討が必要である。

平成 14 年度

薬師遺跡—石上町

1.はじめに

今回の調査は、天理市役所建築課を事業主体とする石上市営住宅建て替え事業に伴う当該事業予定地内における埋蔵文化財の有無確認を目的に実施した発掘調査である。当初は約 10000m²におよぶ広大な敷地面積であったため調査対象地内の遺構・遺物包含層の分布状況の把握を目的とした試掘調査を実施し、遺構・遺物包含層の遺存が認められた地点のみ拡張して本調査の対象とした。

薬師跡は、古墳～中世の遺物散布地として知られる周知の遺跡であったが、これまでに発掘調査がおこなわれたことが無く、その実態については不明であった。そのため当調査地の成果により新たに遺跡に関する多くの情報が得られるものと期待された。

調査は平成14年9月24日より開始し、同年11月29日にすべての作業を終了した。総調査面積は1044m²であった。

II. 調査の概要

1. 試驗調查

現状の調査対象地における地形の状況では、その多くが低丘陵上にあり、わずかに南側縁辺に蛇行し

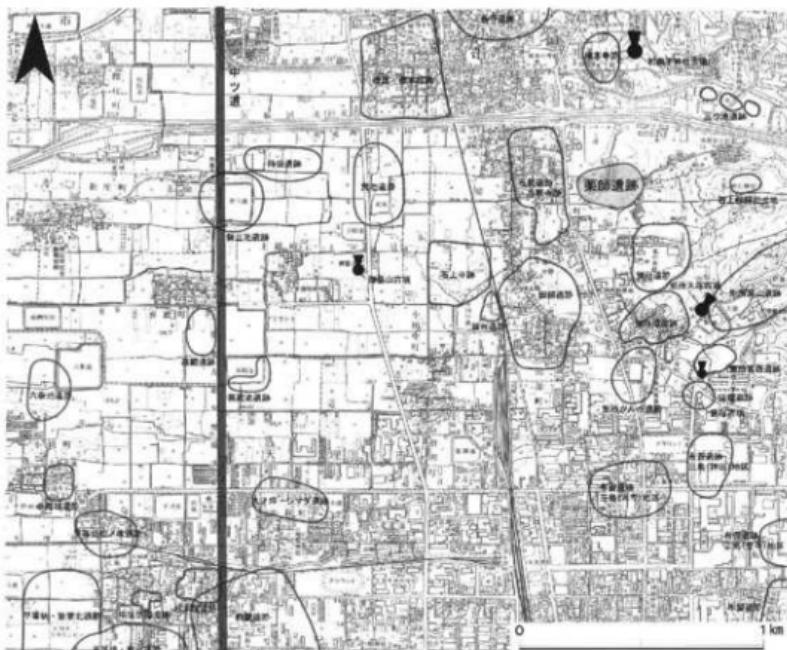


図1 蔊師遺跡と周辺の遺跡分布図 (S= 1 /2000)

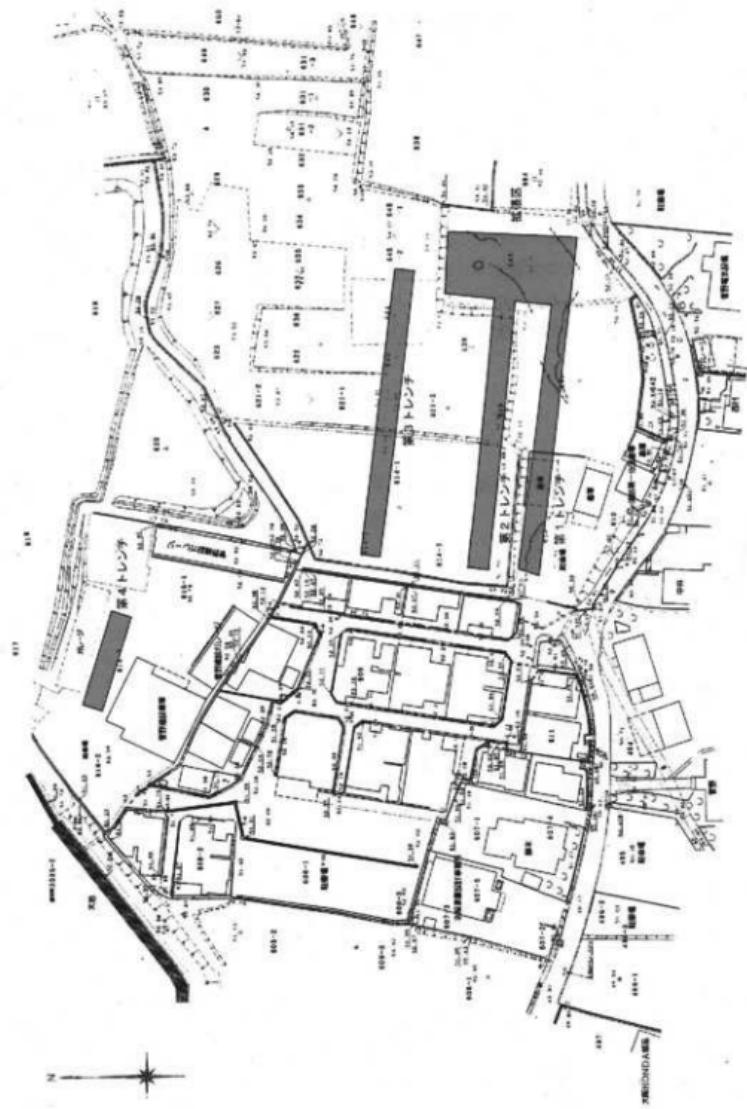


図2 各調査区位置図 (S=1/1000)

て西流する河川付近の低地となるものであった。こうした現状地形に配慮しつつ、広大な敷地の西北側に一ヶ所、東側に三ヶ所の合計四ヶ所に幅4mを基調とする東西方向の調査区を設定して試掘調査を進めた。

その結果、調査地東側南辺の低地付近に設定した第1トレンチおよびその北側の低丘陵上に平行して設定した第2トレンチ東半付近にのみ古墳～中世後期（鎌倉・室町時代）の遺物包含層の遺存と自然河道、土坑等の遺構の存在を確認することができた。その他の低丘陵上の各試掘調査区（第3トレンチおよび第4トレンチ）については後世の削平による遺構面の破壊が著しく、わずかな遺物の出土は認められるものの遺構等の遺存はほとんど認められなかった。従って、本調査の対象と成り得る範囲は前述の第1トレンチ全域および第2トレンチ東端付近までに限定されることとなった。

2. 本調査の成果

試掘調査の結果、本調査の対象範囲とした調査対象地南～東南部の低丘陵縁辺付近の地点についてのみ拡張区を設定して本格的な調査の実施に至った。

以下、各項目ごとに列記し調査成果の概略をまとめておきたい。

（1）第1トレンチ

【層序】

丘陵縁辺の低地部に設定した第1トレンチでは、図4に示したような土層堆積状況を呈しており、基本的な層序の内容は以下の通りであった。

当調査区西壁土壠断面では、最上部より耕作土（第I層）、旧耕作土・床上（第II層）、にぶい黄褐色

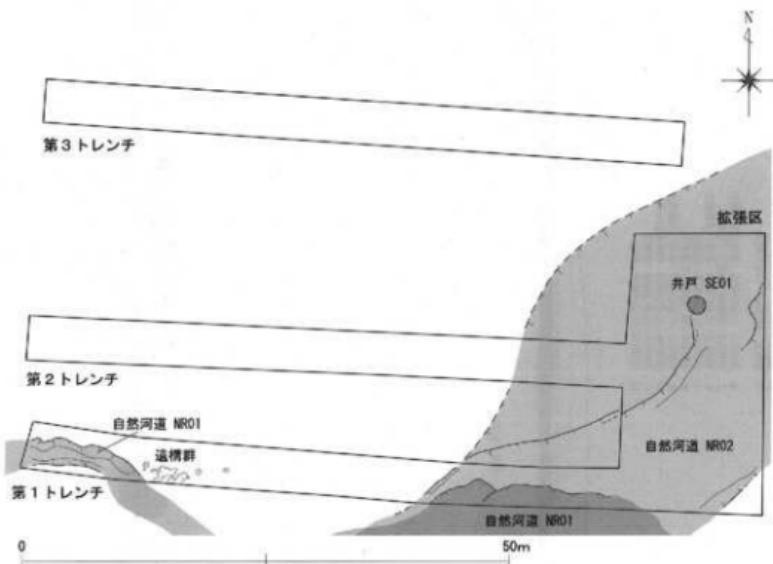


図3 第1・2・3トレンチおよび拡張区図平面図 (S = 1/500)

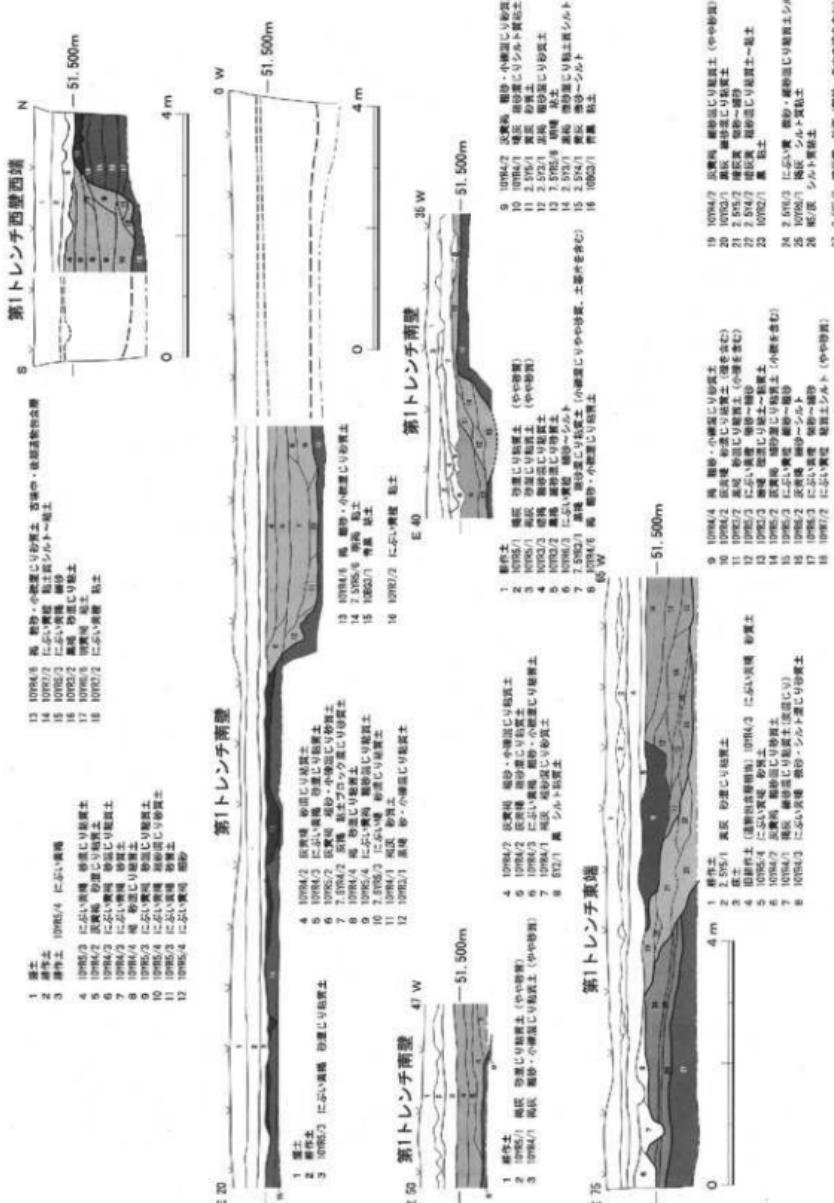


図4 第1トレンチ西壁および南壁土層図 (S = 1/80)

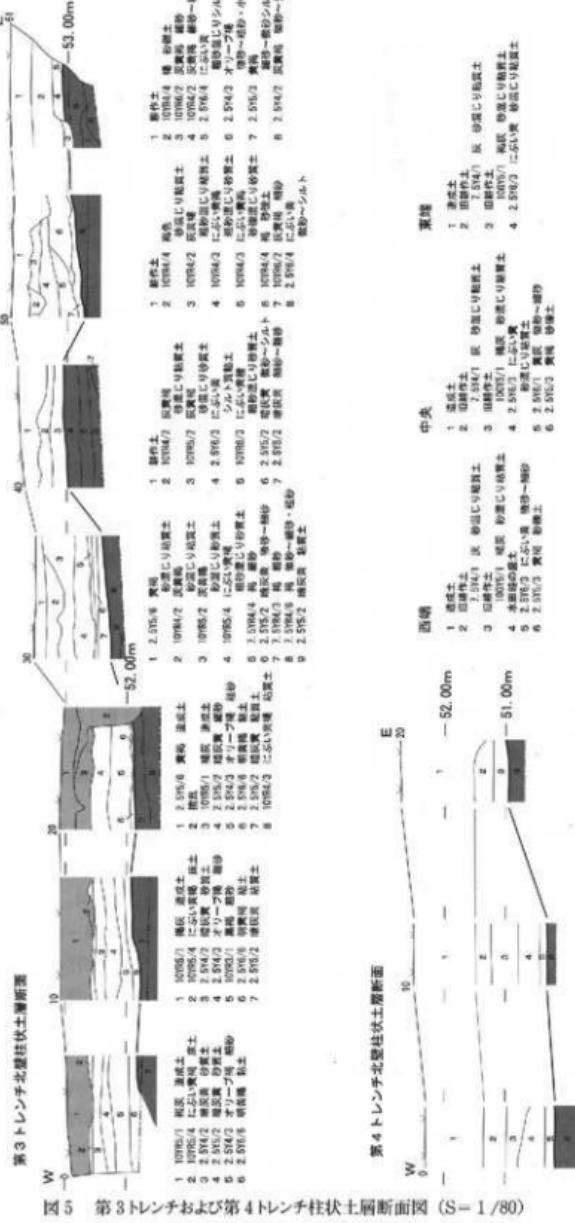


図5 第3トレンチおよび第4トレンチ柱状土断面図 ($S = 1/80$)

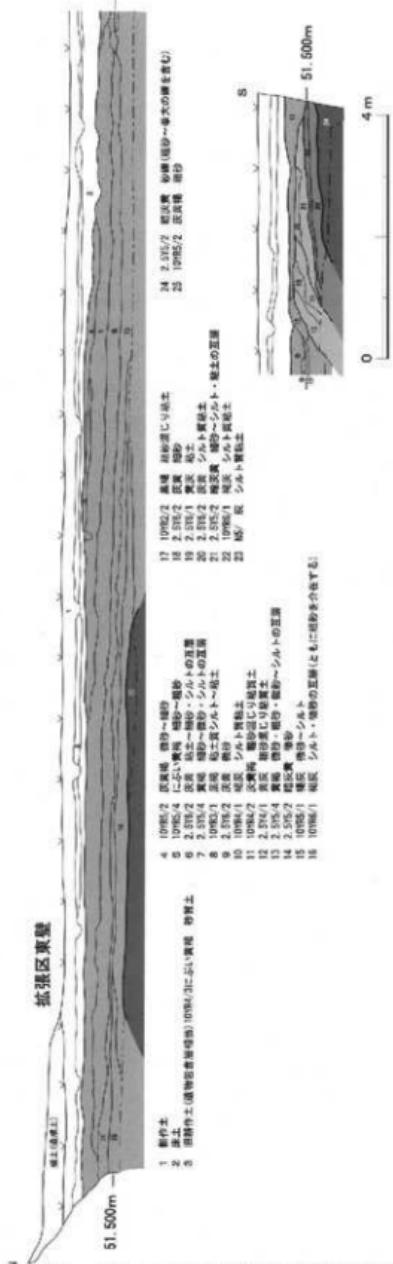


図 6 第1・2トレンチ東側拡張区東壁土層断面図 (S=1/80)

砂混じり粘質土（第Ⅲ層）と耕作に伴う再堆積層が続き、下位では遺物包含層となる黒褐色微砂混じり粘質土（第Ⅳ層）、基盤層を成す黄褐色砂質土（第Ⅴ層）となる。具体的には、第Ⅲ層および第Ⅳ層が古墳～中世の遺物を包含する土層を成し、第Ⅴ層では標高51.3m前後の地山面となっている。

東西に長いトレンチの両端と中央では層序は若干異なり、中央部では耕作土（第Ⅰ層）直下で地山（第Ⅴ層）となるのに対し、東西の両端では黒褐色微砂混じり粘質土（第Ⅳ層）以下で砂、砂質土、粘土層等の自然河道堆積が見られた。なお、自然河道堆積の上層断面からは新田2条の重複関係を確認している。これら河道埋土では上部堆積層中に多量の土器片が含まれ、底面では青色もしくは緑青色粘土・シルトによる無遺物の土壤となっている。

【検出遺構】

第1トレンチ西半遺構面検出遺構群（図7上半）

トレンチ中央～西の地山（第Ⅴ層）直上に遺存した小穴、土坑や溝から構成される遺構集中部分を指す。中世以降の削平を免れたために残された遺構群である。残りの浅い不整形な溝や土坑の埋土からは古墳中・後期（5世紀中頃～6世紀前半）の土師器・須恵器がコンテナ約3箱程度の量で出土しており、小穴も建物を構成するような配置で検出されたことから当該時期の集落域の一部となることが考えられる。

第1トレンチ自然河道 NR01

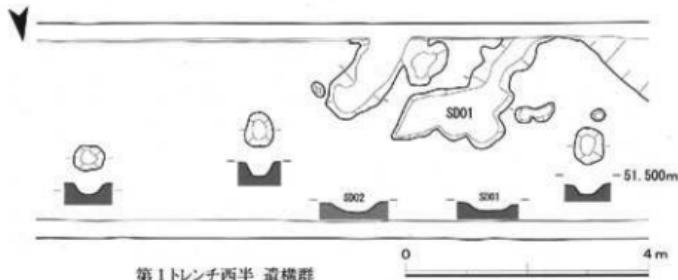
第1トレンチ西端で検出された自然河道である。幅約3m以上を検出しており、最深部では深さ約0.9mを測る。埋土からは古墳～中世後期の土器片の出土がわずかに見られた。河岸付近では河岸法面を抉るような部分が多く見られ激しい水流のあったことが窺われる。また、トレンチ東側の南半でも部分的に同時期幅の遺物出土の見られる河道縁辺の堆積が見られたことから西端検出河道の延長部分と考えられた。おそらく丘陵縁辺裾部を蛇行しながら西流する旧河道であったと思われるものである。

(2) 第2トレンチ

[層序]

西半側の標高 52.8m 前後の平坦部においては、基本的に上位に部分的に残る盛土層を最上層として、次に旧耕作土（第Ⅰ層）、床上（第Ⅱ層）、にぶい黄褐色粗砂・小礫混じり粘質土（第Ⅲ層）、灰黃褐色砂混じり粘質土（第Ⅳ層）、暗褐色砂礫混じり砂質土（第Ⅴ層）、浅黄色砂質土～粘土質シルト（第Ⅵ層）の層順での堆積が認められた。第Ⅰ～Ⅲ層の耕作面以下では、第Ⅳ層に古墳～中世の遺物の包含が若干量で認められたのに対し、下位の第Ⅴ・Ⅵ層では全く遺物を含まない地山相当層であった。こうした状況は第2トレンチ東半の途中で一変する。調査区東半の第Ⅲ層以下では砂礫混じりシルト～砂質土の無遺物の堆積層が続き、下位では砂礫主体の基盤層（地山相当層）となって東向きに地山面が緩やかな斜面となって微高地を成す地形が知られた。

この地形的状況は、後述する拡張区検出の自然河道 NR02 の西侧河岸肩部付近にまで続き、平坦面の地山面では標高 52m 前後の西側にやや低くなる微地形が自然河道埋没後に形成されたことが予想される。



第1トレンチ西半 遺構群

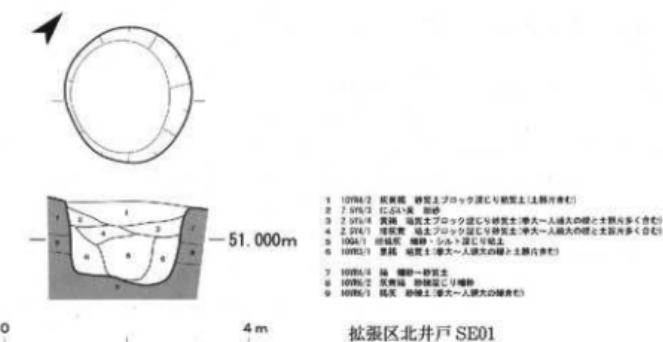


図7 主要遺構平面・土層断面図 (S = 1 / 80)

なお、第V層より上位では中世以後の耕作によりかなりの地形改変が進んだことも土層観察により知ることができた。同様に低丘陵上の第3・4トレンチ等その他の試掘調査区でも地山面直上までにおよぶ削平が中世以降に及んでいたことが知られている。

(3) 第3トレンチ

[層序]

第3トレンチでは西側の低地部から東側へと現状地形での段差が見られ、宅地造成時の大幅な地形改変が予想された。調査区北壁の土層断面観察から西半低地部では上部堆積層は現地表面下0.4~0.5mまでが旧市営住宅建設時の造成土であり、以下は西側へ下降する丘陵斜面上の堆積土層が地山面直上にまで0.8~1.2m以上の厚さで介在する状況であった。

東半では、近年まで耕作地となっていたため上部には現地表面下0.4~0.6mまで耕作に伴う堆積が統一した。東端に向かうに連れて上昇する地山面には凹凸が見られ、耕作土と地山の間には砂、砂質土を基調とする間層が介在した。調査区全域において、これらの間層には基本的に遺物が全く含まれない状況であった。

(4) 第4トレンチ

[層序]

調査地最北端の第4トレンチでは、現状ではすでに造成地化しており、最上部より1m前後の造成土が見られた。以下は基本的に旧耕作面に伴う耕作土と床土層が続き地山面直上には黄~黃灰色微砂・細砂が薄く堆積していた。地山面は東側で上昇し、旧地形を反映する状況が窺えた。なお、各層ともにほとんど遺物は含まれていなかった。

(5) 拡張区

[層序]

第1トレンチ東半の一部と第2トレンチ東端付近を含む調査地東南隅の低地部に設定した調査区である。図6に示した拡張区東壁の土層堆積状況からは、拡張区の全体的に第1・2トレンチの第I~III層と同様の上部堆積層以下に砂とシルト、粘質土等による自然河道堆積層が続くことが確認され、北西に向かい河道肩部となる黄褐色砂礫土からなる地山面の上昇が観察できる。最高所の北西隅では標高52.0m前後となるが、南側の河道底面では最深部で標高50.8mを測りその比高差は約1.2mとなっている。

[検出遺構]

第1・2トレンチおよび拡張区自然河道 NR02(図3)

第1トレンチ東半より拡張区にかけて北東から南西の方向に流れる自然河道である。幅15~20mで北東側の低丘陵縁辺に沿うように位置しており基本的に無遺物である。埋土中の砂屑堆積に植物遺体等とともにごくわずかに弥生~古墳の土器小片が出土しているが、埋没時の時期幅に含まれるものと理解しておきたい。

拡張区北井戸 SE01(図7下半)

拡張区北辺の自然河道 NR02 北西岸付近で検出した素掘りの井戸である。径約1.6m、深さ1.0mを測り、埋土上部より完形あるいは半完形の土師器小皿、羽釜等の中世土器類がコンテナ約1箱程度の量で出土している。

これらの土器類はほぼ14世紀後半~15世紀初頭頃に属する時代のものであり、室町時代前半期に廃棄された井戸の廃絶時期を示す土器群として捉えることができる。井戸の用途については、井

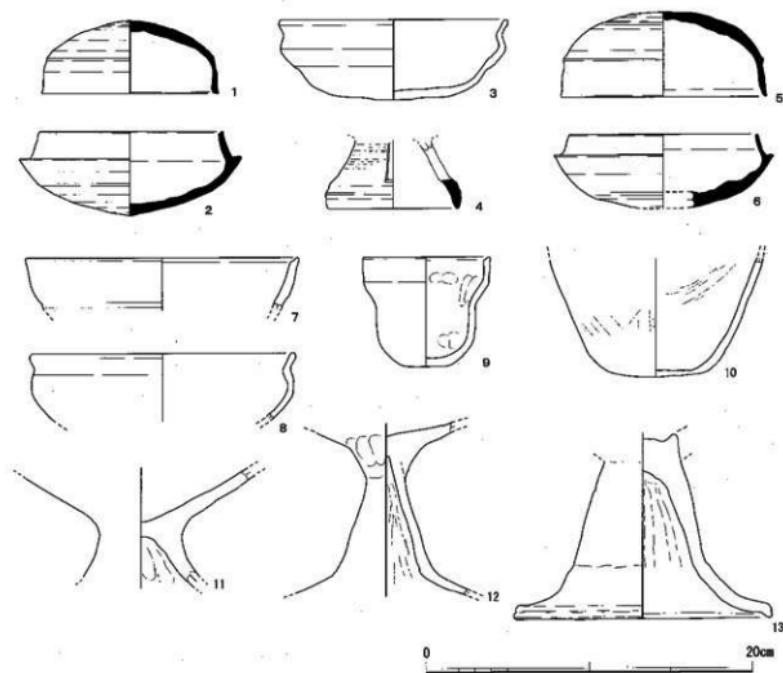


図8 第1トレンチ西半検出遺構群出土土器実測図 (S=1/3)

番号	器種	色調	粘土	構成	法量		残存率 (口縁)
					口径・底径	器高(残存高)	
1	圓底器 杯	10YR8/2灰黃褐色	密(小石混じり)	良好	10.4	4.8	2/3
2	圓底器 杯	N4/灰	密	良好	11.2	5.6	3/4
3	土師質土器 杯	SYR5/6明赤褐色	やや密	良好	13.8	4.4	3/4
4	圓底器 高杯 圈	10Y4/1灰	密	良好	8.1	4.1	1/2
5	圓底器 杯	10YR8/2灰黃褐色	密	良好	12.7	5.2	1/2
6	圓底器 杯	N6/灰	密	良好	11.6	4.5	1/2
7	土師質土器 杯	SYR5/6明赤褐色	やや密	良好	16.6	3.1	1/2
8	土師質土器 杯	SYR5/6明赤褐色	やや密	良好	16.0	4.1	1/2
9	土師質土器 杯	SYR6/6橙	密	良好	7.9	6.6	3/4
10	土師質土器 林	SYR6/6褐色	やや密	良好	13.0	7.1	底部2/3
11	土師質土器 高杯 圈	SYR7/6橙	やや密	やや良好	—	7.2	—
12	土師質土器 高杯 圈	SYR7/6橙	やや密	やや良好	—	10.2	—
13	土師質土器 高杯 圈	SYR7/6橙	密	良好	15.6	11.4	底部2/3

表1 第1トレンチ西半検出遺構群出土土器観察表

戸枠や周辺施設を伴わないものである点からいわゆる野井戸(耕作地における農業用水確保のための井戸)と考えられる。

なお、河道に近接して検出されたものであるが、同時併存ではなく河道埋没後に農地化した段階に掘り込まれたものであり重複完形も認められない。

III.出土遺物

今回の調査では、遺物包含層および遺構埋土より古墳中・後期から中世後期にかけての時期の土器類がコンテナ約10箱分の量で出土している。そのほとんどが第1トレーナーおよび拡張区の自然河道NR01からの出土土器となっている。

以下、図示したものについて概観する。

第1トレーナー西半検出遺構群出土土器 (図8)

1・2・4・5・6は須恵器である。1・5の杯蓋や2・6の杯身では、それぞれに口径の大小や部分的な特徴、調整部位の多少等の差が明瞭であり形態差や時期差を示している。4は短脚高杯の脚部である。外面には長方形透かし穴とカキ目調整が残る。

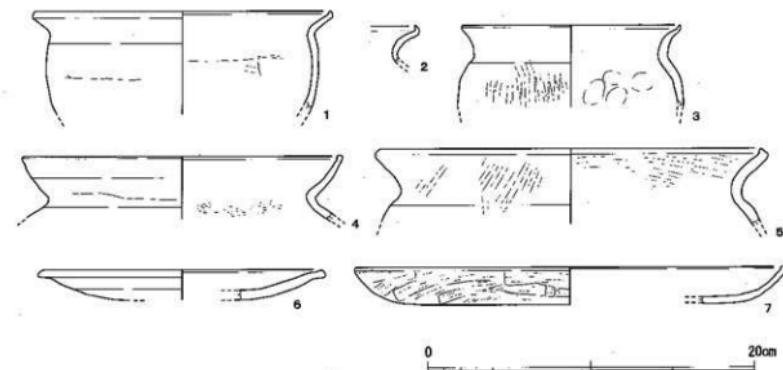


図9 自然河道NR01出土土器実測図1 (S=1/3)

番号	種類	色調	胎土	焼成	法量		残存率 (口径)
					口径・底径	蓋(残存率)	
1	土師質土器 蓋	7SYR8/0透黄焼	密	やや良好	18.0	6.2	1/0
2	土師質土器 蓋	2SYR8/0焼	密	良好	—	2.3	破片
3	土師質土器 蓋	SYR8/0焼	密	良好	13.4	5.0	1/0
4	土師質土器 蓋	7SYR8/4こぶし焼	やや密	良好	29.8	4.0	2/0
5	土師質土器 蓋	SYR8/4透焼	やや密	良好	23.2	4.4	1/0
6	土師質土器 盆	SYR7/0焼	密	良好	1.8	17.0	1/0
7	土師質土器 杯	7SYR7/0焼	密	良好	26.2	2.4	1/0

表2 自然河道NR01 出土土器観察表表1

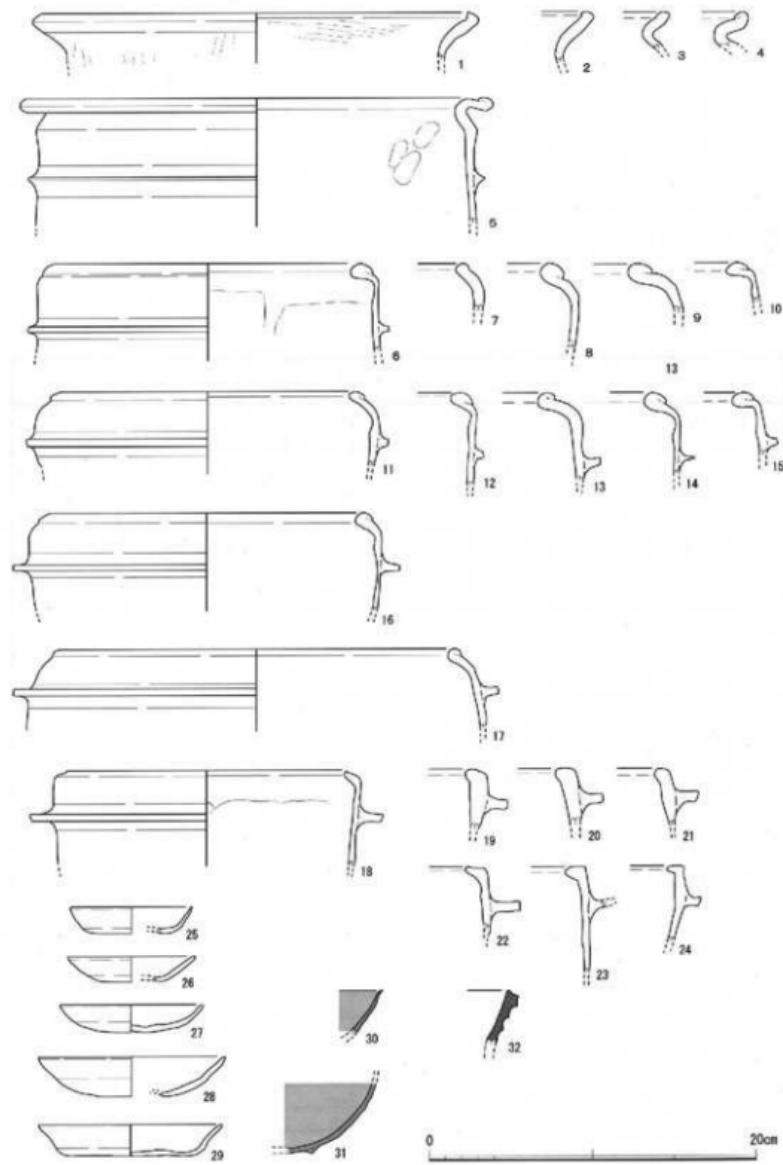


图10 自然河道 NR01 出土土器实测图 2 (S= 1 / 3)

3・7・8・9・10・11・12・13は土師器である。3・8は短く外側に屈曲する口縁をもつ鉢である。いずれも胎土からみて粗製品である。9・10は平底の鉢である。器形的には同様のものであるが、大小それぞれに特徴が異なっている。7は壺である。内窓口縁と口縁端部の形状に布留型壺特有の特徴が伝統として残されている。11～13は高杯の脚部である。いずれも大型品となる。11・12はおそらく楕形の杯部が、13には深めの有稜杯部が付されたものと思われる。

以上、これらのまとまつたかたちでの出土土器はすべて溝SD02埋土からの出土であり、いずれも古墳後期(5世紀末～6世紀前葉)に帰属時期が求められる。

第1トレンチ自然河道NR01出土土器1(図9)

1～7は自然河道NR01出土の古墳～平安時代の土師器である。

1は口径の広い鉢である。口縁端部にはつまみ上げが見える。外面はナデ調整である。2は壺口縁部

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率 (口縁)
					口径・底径	標高(残存高)	
1	土師質土器 瓶形	7.5YR7/4にぶい緑	やや密	良好	26.2	3.0	1/4
2	土師質土器 瓶形	7.5YR8/4淡黄緑	やや密	良好	—	3.2	破片
3	土師質土器 瓶形	10YR8/4淡黄緑	密	良好	—	2.8	破片
4	土師質土器 瓶形	10YR8/4淡黄緑	密	良好	—	2.1	破片
5	土師質土器 瓶形	7.5YR8/4にぶい緑	密	良好	18.2	6.6	1/2
6	土師質土器 瓶形	10YR8/2灰色	やや密	良好	18.8	5.3	1/4
7	土師質土器 瓶形	2.5YR8/4灰黒	密	やや良好	—	2.9	破片
8	土師質土器 瓶形	7.5YR8/4淡黄緑	密	良好	—	5.5	破片
9	土師質土器 瓶形	7.5YR8/1灰白色	やや密(小石混じり)	やや良好	—	2.6	破片
10	土師質土器 瓶形	10YR7/3にぶい黄緑	密(小石混じり)	良好	—	2.6	破片
11	土師質土器 瓶形	10YR8/4淡黄緑	やや密	良好	18.0	4.5	1/2
12	土師質土器 瓶形	10YR8/2淡黄緑	密	良好	—	5.6	破片
13	土師質土器 瓶形	10YR 8/4淡黄緑	密	良好	—	5.4	破片
14	土師質土器 瓶形	7.5YR8/4淡黄緑	やや密	良好	—	5.0	破片
15	土師質土器 瓶形	10YR7/4にぶい黄緑	密	良好	—	3.8	破片
16	土師質土器 瓶形	7.5YR8/4淡黄緑	やや密	良好	19.2	5.9	1/2
17	土師質土器 瓶形	7.5YR7/6緑色	やや密	良好	24.0	5.0	1/2
18	土師質土器 瓶形	7.5YR8/2灰白色	やや密	良好	17.0	5.7	1/2
19	土師質土器 瓶形	2.5YR8/4淡黄	密	やや良好	—	3.8	破片
20	土師質土器 瓶形	10YR7/4にぶい黄緑	やや密(小石混じり)	良好	—	3.5	破片
21	土師質土器 瓶形	10YR7/3にぶい黄緑	密	良好	—	3.4	破片
22	土師質土器 瓶形	2.5YR8/4淡黄色	密	良好	—	4.2	破片
23	土師質土器 瓶形	10YR7/4にぶい黄緑	密	良好	—	6.3	破片
24	土師質土器 瓶形	10YR7/3にぶい黄緑	密	良好	—	4.6	破片
25	土師質土器 盆	7.5YR8/3淡黄緑	やや密	良好	18.0	7.4	1/2
26	土師質土器 盆	2.5YR7/8緑	やや密	良好	13.8	1.5	1/2
27	土師質土器 盆	2.5YR8/6緑	やや密	良好	1.8	8.8	2/2
28	土師質土器 盆	7.5YR8/8緑	密	良好	11.2	2.4	1/2
29	土師質土器 盆	7.5YR7/6緑	密	やや良好	11.2	18.0	2/2
30	瓦器 袋	5Y4/1灰	密	良好	—	2.7	破片
31	瓦器 袋	5Y4/灰白	密	良好	—	4.2	返削1/3
32	陶器 壺体	5H/灰	密	良好	—	3.2	破片

表3 自然河道NR01 出土土器観察表表2

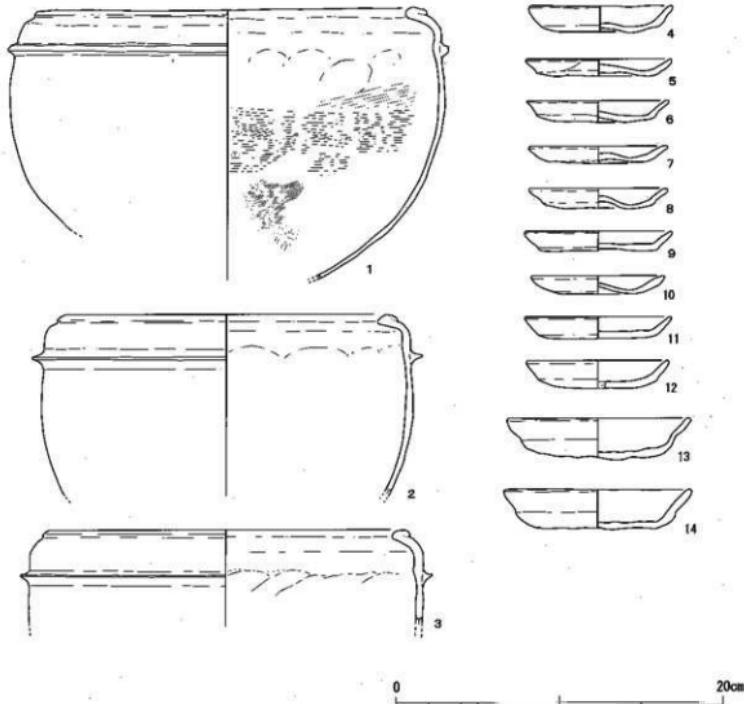


図11 拡張区井戸 SE01 出土土器実測図 (S = 1 / 3)

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量		残存率 (口縁)
					口径・底径	器高(残存高)	
1	土師質土器 瓶蓋	10YR7/4に5%黄橙	密	良好	30.4~32.5	16.3	無形破損
2	土師質土器 瓶蓋	7.5YR7/9橙	密	良好	20.8	10.8	9/10
3	土師質土器 瓶蓋	7.5YR7/7橙	密	良好	22.4	5.8	1/2
4	土師質土器 盆	SYR6/6橙	密	良好	8.6~8.9	1.8	完形
5	土師質土器 盆	SYR6/6橙	密	良好	8.2~8.9	1.0	完形
6	土師質土器 盆	SYR6/6橙	密	良好	8.8	1.2	ほぼ完形
7	土師質土器 盆	SYR6/6橙	密	良好	8.5	1.1	ほぼ完形
8	土師質土器 盆	7.5YR6/6橙	密	良好	8.4	1.2	1/2器
9	土師質土器 盆	SYR6/6橙	密	良好	9.0	1.2	完形
10	土師質土器 盆	SYR6/6橙	密	良好	8.2	1.1	1/3
11	土師質土器 盆	7.5YR6/6淡黄橙	密	良好	9.0	1.3	2/3
12	土師質土器 盆	7.5YR6/6橙	密	良好	8.8	1.7	1/3
13	土師質土器 盆	SYR6/6橙	密	良好	10.7~11.2	2.5	9/10
14	土師質土器 盆	SYR7/6橙	密	良好	10.7~11.4	2.3	9/10

表4 拡張区井戸 SE01 出土土器観察表

の小片である。内傾した端部のつまみ上げが特徴的である。**3**はやや小型の甌である。外面に粗いタテハケ、内面には指頭圧痕とナデ調整が見られる。**4**は布留系の甌である。口縁端部の肥厚した形状と口縁部形態に布留型甌の伝統を残すが、内面調整に削りは施されず形骸化が進んだ布留系の甌である。**5**は奈良時代以降に通有な甌である。口縁部の内外面にハケ調整が見られる。**6**は皿(杯か)である。精良な胎土で製作されており精製品である。**7**は大型の杯(盤か)である。外面は全体的に不整方向に小刻みな削り調整が施され、内面はナデ調整される。奈良時代末～平安時代初頭の帰属時期を考えられる土器である。

第1トレント自然河道 NR01 出土土器 2(図 10)

1～31は自然河道 NR01 出土土器の主体となる中世土器類である。**1～24**は土師質土器の羽釜、**25～29**が土師質土器の皿、**30・31**が瓦器椀、**32**が陶器摺鉢である。

土師質土器羽釜では、口縁部より鉗部にかけての形態により**4**種類の羽釜が認められる。

1～4は外反口縁と口縁端部のつまみ上げ、肥厚が顕著な羽釜である。**5**は口縁部の屈曲が顕著で短く突出した断面三角形に貼り付けられた鉗も特徴的である。これらはいずれも12世紀末～14世紀前半の時期幅で捉えられる一群とされる。

6～17は口縁部が内湾し、端部上端に折り返し肥厚させた口縁部形状を示す一群である。概ね14世紀後半～15世紀前半の帰属と考えられる。

18～24は内傾屈曲した口縁部を特徴とする一群である。他の形状の羽釜に比べると時期幅が限定されるものであり15世紀前半頃の帰属と考えられる。

25～29は土師質皿である。口径の小さなものから大きなものまでが幾つか出土している。色調では橙色が主体となる。帰属時期については14世紀代のものが主体を占めると考えられる。

30・31は瓦器椀である。器面の摩滅が著しくミガキ調整等は看取できなかった。どちらも形態的特徴から13世紀後半から14世紀前半の間に帰属するものと思われる。

32は陶器の摺鉢である。著しく摩滅した口縁部のみの小片である。備前系のものと思われるが時期等は不明である。

拡張区北井戸 SE01(図 11)

1～14は井戸 SE01 出土の土師質土器類である。

1～3の羽釜はいずれも同形態のものである。内傾した口縁部と口縁上端の肥厚が特徴となっている。

4～14の土師質皿では小型品と中型品の二種が見られた。色調は橙色を基調としており、形態的に若干のばらつきはあるもののどれも底部付近までに口縁部からのヨコナデが及ぶ。

これらの中世土器類の帰属時期は形態的にまとまりをもつ羽釜の編年的位置付けから14世紀後半から15世紀初頭頃と考えられる。

第2トレント中央～東上部堆積層(図 12)

1・2はともに第2トレント中央部から東半分にかけての調査区内の地山面あるいは旧耕作土と地山相当層の間層付近で出土した完形の土師質土器小皿である。大小2点があるがそれぞれ別個に出土している。いずれも橙色の色調を呈する。概ね14・15世紀代の帰属が考えられるものである。



図12 第2トレンチ遺物包含層出土土器実測図 (S=1/3)

備号	器種	色調	胎土	性成	法量		残存率 (口縁)
					口径・底径	器高(残存高)	
1	土師質土器 皿	GYR8/B橙	褐	良好	8.2	1.4	完黏
2	土師質土器 皿	GYR8/B橙	褐	良好	9.9	1.9	ほぼ完黏

表5 第2トレンチ遺物包含層出土土器観察表

IV.まとめ

今回の調査では、実態不明瞭であった薬師遺跡について遺跡の存続期間、主体となる集落の展開時期等について新たな知見を得ることができた。集落の展開は低丘陵上からその縁辺にかけての範囲に5世紀後半～6世紀前半の古墳中・後期集落の拡がりが推定され、中世後期には農地開拓や耕作により現状地形に近いものへと変化を遂げたようである。

また、自然河道 NR01 が機能していた中世段階ではその周辺に村落の展開が想定され、調査対象地南側の現村落域と重複したものと考えられる。現状ではこの辺りには水路上の河川が存在するが、本来の地形的要件に見合うものとして前記の自然河道が位置付けられることから近世・近代の河川付け替えが前代までの河道を踏襲しつつ丘陵裾へと移動したものと思われる。

結論として、調査対象地の大半を占める低丘陵上では中世後期以降の耕地化が進んだために既にそれ以前の遺構の多くが削平のため消滅していたと言わざるを得ないが、低地の縁辺部には削平を免れた遺構群の埋没遺存が推定されるため、今後はその辺りに注意を払う必要があろう。

写 真 図 版



調査区全景（北から）



調査区全景（西から）

図版2
長寺遺跡



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



SE-03 (井戸遺構)



SE-03 (井戸遺構)

図版 4 薬師遺跡



調査地遠景
(上空から・左上が北)



調査地遠景
(上空から・左上が北)



第1トレンチ西端
自然河道 NR01
(東から)



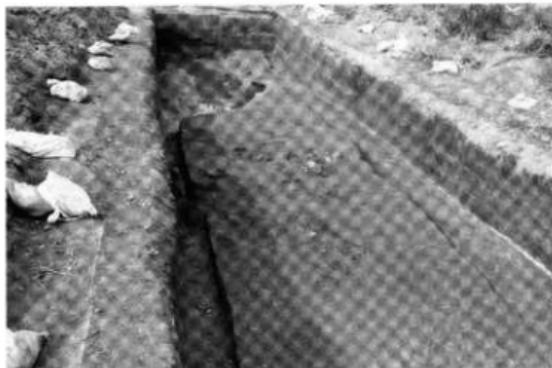
第1トレンチ西端
南壁自然河道 NR01
土層断面(北西から)



第1トレンチ中央
南壁土層断面
(北東から)



第1トレンチ西端
西壁土層断面
(東から)



第1トレンチ西半
造構群 検出状況
(東から)



第1トレンチ西半
造構群 完掘状況
(北西から)



第1トレンチ西半
遺構群 完掘状況
(北から)



第1トレンチ
検出遺構 全景
(西から)



拡張区北
井戸 SE01 検出状況
(東から)



拡張区北
井戸 SE01 遺物出土状況
(西から)



拡張区北
井戸 SE01 検出状況
(西から)

平成19年12月21日

天理市埋蔵文化財調査概報

平成13・14年度

発行 天理市教育委員会

編集 天理市川原城町605番地

印刷 天啓

天理市森本町810番地